

**平成21-23年度 日本学術振興会 科学研究費補助金  
基盤研究(B) 「談話のカートグラフィー研究：主  
文現象と複文現象の統合を目指して」 研究代表者  
遠藤喜雄 2010年度 研究概要**

雑誌名	Scientific approaches to language
巻	10
ページ	151-152
発行年	2011-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000685/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000685/</a>

平成 21-23 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)

「談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して」

研究代表者 遠藤喜雄

## 2010 年度 研究概要

本プロジェクトは、ヨーロッパを中心に開発中の文の統語構造を地図のように詳細に解明する(*cartography of syntactic structures*: 以下、カートグラフィー)というプロジェクトの中で、特に談話に関わる現象について焦点を当て、主文と複文の性質を共通点と相違点に着目して統合することを目標とする 3 年計画のプロジェクトである。2 年度に当たる 2010 年度には、以下の活動を行った。

まず、2010 年 11 月の日本言語学会のワークショップにおいてカートグラフィープロジェクトのチームリーダーの一人である Guglielmo Cinque 教授を招聘し、複文におけるカートグラフィー研究の現状と展望を紹介してもらった。同時に、広い観点からの現状を把握するために、Cedric Boeckx 教授を招聘し、カートグラフィーとミニマリズムを取り巻く状況について解説してもらった。さらに、両氏には、日本言語学会の前後に北海道大学と東北大学で開催されたカートグラフィーのワークショップにおいて日本言語学会よりも詳細で専門的な講演をしてもらい、同時に北海道大学、東北大学および神田外語大学の大学院生や研究員による研究発表にコメンテーターとして参加してもらい、日本におけるカートグラフィーの研究の新たな可能性を模索した。

次に、本科研のプロジェクトにおけるもう一つの目標である、優れた日本語学／英語学の研究成果を広く海外に発信し、カートグラフィーの枠組みを通して、日本における日本語学／英語学の研究を世界レベルまで引き上げるという試みを、昨年度に続き行った。具体的には、日本語学における優れた研究成果の中で野田尚史と南不二男の研究を、遠藤が 8 月の

中国の国際会議と9月のベルギーでの国際会議で、(i)概要を紹介し、(ii)それらの研究がカートグラフィーの枠組みに適合するよう理論化し、(iii)カートグラフィープロジェクトに大きな貢献をすることが可能である点を示し、(iv)新たに副詞における前提と断定の意味解釈の違いをムードの点から述べた。この成果は、Cambridge University Press と John Benjamins Publishing Company から出版される予定である。また、カートグラフィーにおける連鎖(chain)の果たす役割を、遠藤が2011年2月に横浜国立大学で開催された国際会議と2011年3月に南山大学で開催されたワークショップで発表した。特に、連鎖を表示的に定義する従来の研究に対して、派生的に定義する新たな可能性を提示した。最後に、海外にあまり知られていない優れた研究を海外発信する試みとして、日本言語学会、北海道大学および東北大学でのワークショップにおいて、井上和子、遠藤喜雄、益岡隆志、森山卓郎が発表を行い、これらの考えを洗練して、国際会議で発信する可能性を探った。以上の研究成果は、研究報告書にまとめあげ、後に出版する予定である。

また、研究分担者の長谷川信子は、統語構造と語用的意味構造との関係について研究を進め、8月に北京で開催されたAsia-GLOW において研究発表を行い、更に、9月には、Goergetown 大学から Paul Portner 氏を招聘し、国内からも統語論と意味論の研究者を招いてワークショップを開催した。このワークショップで発表された研究については、巻末の活動報告を参照されたい。